

【書評】

原 武史著『知の訓練—日本にとって政治とは何か—』

新潮新書, 2014年7月, 222頁

森 本 泉

「昭和天皇の即位を祝う事業として1928(昭和3)年11月から始まったラジオ体操もまた、朝の特定の時間に行われました。その時間までに決められた場所に集まらなければなりませんでした」(第一章 時間と政治 39ページ)という記述から、評者が子供の頃の夏休みの恒例行事が思い出された。夏休みになると毎朝6時半からだったか、ラジオ体操に参加するために公園に子供達が集められた。開始直前になると子供の親や近所の人々も集まり、朝から公園に活気がみなぎる。「新しい朝が来た、希望の朝だ」というラジオ体操の歌声が始まると走り回っていた子供も音源の方向に体を向け、指示通りに補助体操を行う。やがて「ラジオ体操第一!」という威勢の良い声が響き、続いて流れるピアノの音と掛け声に合わせてラジオ体操が始まる。大人や兄姉に連れてこられた幼児も周囲の動きをまねて体操の輪に参加する。たまに前後左右を間違えて動くと、大人が注意をしたり、笑いがおこったりする。ラジオ体操が終了すると子供達は我先に走って列に並び、担当の大人が子供の差し出す首から下げた出席カードに次々とハンコを押していく。夏休みのラジオ体操の最終日に、出席のハンコで赤くなったカードを見せると、鉛筆のような景品が貰えたものだった。

評者のほのぼのとしたラジオ体操の思い出とは裏腹に、「もし顔を出さないと、みんなが集まっているのに、なぜあいつだけがいないのか」と訝しがられる。地域の住民がお互いに見張っているわけで、相互監視です。そしてそこには同調圧力が生まれ、出席をしないやつは『非国民』というレッテルを貼られスポイルされるわけです」(同 39

ページ)と著者は指摘する。評者のラジオ体操体験は戦時中ではなかったもので、顔を出さなくても「非国民」呼ばわりされることはなかったが、寝坊したりすると泣きべそをかきながら走ってラジオ体操の場に駆けつける子がいたくらい、参加への圧力は強かったと言える。具合が悪かったり親の帰郷や旅行に連れて行かれたり(旅先の公園や校庭でラジオ体操に参加することもあった)、都合により出席できないこともあるが、そういった事情がなければラジオ体操に参加することは極めて当然のことであった。日本の多くの子供達が夏休みの朝からラジオ体操のために同じ時間に集まり、同じ動作をしていたことを改めて考えてみると、凄いことに思われてくる。

ラジオ体操の凄いところは他にもある。ラジオ体操の動作は身体に内在化され、その音楽と掛け声を聞くとそれらしく身体を動かしてしまうのだ。日本社会において、社会人研修や工場の操業前の準備体操にも用いられ、お年寄りの健康体操にも重宝されているのは、ラジオ体操が「国民体操」のごとく人々に身体化されているからに他ならない。このように日本社会に深く広く浸透したラジオ体操とは、一体何なのだろうか? 「一見自明に見えるもの、疑いもしないような日常の中に溶け込んでいるものをまずは疑ってみる。どのようにしてそれは可能になったのか。どういう判断や決定が下されていたのだろうか」(20-21ページ)と著者が授業の狙いとして述べるように、これまで当たり前とってきたことにあらためて問いをたて、それを政治学の観点から解き明かしていくことが本書の目的である。

本書は、2012年9月から13年1月にかけて行われた「比較政治学」の講義の前半の9回分について、録音をもとに編まれたものである。「〇〇と政治」という題が9つ設定され、各講義が一章ごとに論じられていく。

第一章 時間と政治では、「だれが日本の時間を支配しているのか」という問いをたて、1873年に以降に太陽暦が導入され、それが日本社会に制度化されていったことが歴史的に説明される。天皇ですら分単位のスケジュールを破る自由がなかったと指摘する。では誰が時間を支配していたのだろうか？実は時間そのものが支配者（36ページ）になっていたということで、日本の最高指導者であった天皇までもがその被支配におかれていたことを「奇妙な国家」として指摘する。

第二章 広場と政治では、まず東京にある皇居前広場（正式には皇居外苑）が「世界一広い広場」であること自体知られていないことを、著者は三島由紀夫の口を借りて「貴様それでも日本人か！」と学生に活を入れる。そして、こんなに広い広場があるのに、なぜ日本では「広場の政治」が根付いていないのだろうかと疑問を投げかけ、日本が歩んできた戦前から戦後にかけて近代化の過程で、天皇制の歴史を補助線にしてGHQの意図がいに反映され、今日の皇居前広場が創り出されてきたのが解き明かされていく。最後に、皇居前広場では天皇や皇室のための行事は開かれても、それ以外の集会は開かれない、そのような広場とは憲法上におかしいのではないかと学生に問いかける。

第三章 神社と政治は、日本でもっとも政治的な神社である靖国神社を取り上げる。著者は「明治から敗戦にかけては陸海軍直轄の神社であったという意味で、戦後唯一生き残った軍事施設と言ってもよい」（73ページ）と指摘する。なぜそういえるのか、戦争との関連で解き明かされ、その関係が今なお継続していること、そしてなぜそれが問題化しているのか、何が問題なのかが説明される。

第四章と第五章は宗教と政治を取り上げる。第四章では、戦争に関する展示がある博物館、遊就

館がある靖国神社がいかに特殊な宗教施設であるのか、天皇制に言及しながら説明される。神社をめぐって、もともとは天皇を神にするためにつくられた施設であったのが、現代では人々は健康や合格、病気の治癒を祈る場になっているという不思議な状況が起きている。明治時代に「神社神道は宗教ではない」と憲法に定められ、国家が神社を管理するようになったのだが、戦後GHQによって神社は国家から切り離されて一つの宗教団体となった。しかしこの歴史的経緯から、神社という存在は、戦後日本の政治と密接な関係にあることが示唆される。また、神社の他にも政治に大きな影響を与える宗教集団があることが指摘される。第五章は、不思議な「宗教」である神道について、二つの神<伊勢神宮 VS. 出雲大社>の対立がいかに生じたのか、神話の世界と歴史を紐解きながら解説していく。アマテラスとオオクニヌシという神々がいかに対立するようになったのか、時代は明治維新に遡り、その経緯が解き明かされていく。

第六章と第七章では都市と政治が論じられる。第六章はなぜ東京には政治に“中核”がないのか、これに対し第七章はいかにして民都・大阪は生まれたのか、それぞれ鉄道と団地に言及しながら東京と大阪における政治の違いが明確に示されていく。そして、特に首都圏に住む者に対して東京＝日本と思ってはならないと戒め、日本と一口に言ってもそれは決して単一のものではないことを強調する。このことは、次の第八章 地方と政治に引継がれ、地方の現状から日本の多様性がさらに浮き彫りにされていく。著者が「アメリカ化」と呼ぶモータリゼーションを前提として町が創られていく地方が経験してきた近代化の過程、それは道路などのインフラ整備のための公共事業がつくり出されてきた「親心の政治」によるものであることが示される。そして、このことは日本の構造的な問題であること、つまり太平洋側を重点的に発展させてきたことにより、地方選出の政治家たちが日本の近代の在り方に抱くようになった「怨念」がそうさせたことを指摘する。

第九章 女性と政治では、「元始、日本の女性は

政治的存在だった」ことが指摘される。この指摘は、先進国において女性政治家比率が最低の日本の現状からすると意表を突くものであろう。ここでは紀元前の古代ギリシアに「政治」の起源を求め、その西洋の政治においても比較的最近まで女性が除外されてきたのに対し、『古事記』『日本書紀』には女性が多く登場しており、天上の世界を支配したアマテラスの存在から、日本では女性が最高支配者になることが「許されて」いたことが示される。そして、今の皇后についてもその歴史は継承されていることが指摘される。評者は女性であるせいかこの指摘を素直に受け取れず、この神話の世界から引き継がれてきた現代の「まつりごと」における「政治的存在」としての女性の地位が、今もなお神話の世界の延長上にある印象を受けてしまうが、他方で、政治における天皇皇后の「まつりごと」の政治的役割やその影響力を考える必要性、そもそも日本の政治（ポリティクスと政事）とは何なのか考える必要を再認識させられる。

本書は主として明治学院大学国際学部2,3年生を対象にした講義であることから、著者が述べるように難しい学問用語や概念装置はできるだけ使わないように記述されている。随所に抜き打ちテストの状況や、面白い鉄道話、政治家に対する辛口批評、青春時代の思い出、さらには歌声がさしはさまれ、講義ならではのライブ感にあふれている。「政治(学)」と聞くだけで難しそうで学生に敬遠されそうな分野だが、著者が講義中に学生に語りかける(時には歌う)熱意によって、政治が学生にとって日常的な身近なものとして認識され、そこに問いをたて、かつその問いを解き明かしていく政治的思考の端緒が開かれたことであろう。本書には著者のこれまでの研究成果が散りばめられ、それらは現代日本における様々な問題群として提示され、時間軸空間軸を補助線にして政治学的観点から解き明かされていく。本書の書評からは脱線するが、空間の科学である地理学徒のはしくれの評者は、著者の空間的観点に地理学的観点と共通するものを発見し、内心嬉しくなっていたが、本書では地理学への言及はなかった。こ

のことは少し残念であったが、それはともかく、本書は学生向けの講義がもとになっているが、現代日本の政治を理解する端緒を開く現代人の現代的教養にふさわしい「政治学」の新書として、より広い読者層にお勧めしたい。